

鹿沼の自然・栃木の旅

月報第23号

(2014年4月)



北光クラブ
自然観察クラブ 鹿沼

宇都宮貞子『草木おぼえ書』(1972年11月10日・読売新聞社発行)

ごまばな——ショウジョウバカマ——

アメフリバナ(高山) チャセンバナ(野尻)

戸隠の越水ヶ原の枯野で、ショウジョウバカマ(猩々袴)は低く咲き始めていた。平らに貼りついた葉の円座のまん中、重なり合った鱗片の上で。

何の花でも初めに咲く花は清純だ。遠慮がちにつつましい。雪解けの冷たい水がじくじくつき上がる原で、あの深い雪をしのいで来た固い葉のクッションの上に、紫の花の冠がじかに載っている。顔を寄せると、細い杓子形の花弁はピンクなのだが、花の外まで飛び出した大きな萼が紫なのである。長い花柱がツンと出てきて、白く透く柱頭の小皿をのせている。この雌蕊はあんまり長いものだから、蕾の時もはいりきれずに、しまった口からお皿をつき出していておかしい。

紫紺と銀の大屏風——残雪の奥社岳をバックにした黒いハンノキ林の下に、これもミズバショウの最初の花たちが、白い鳥の大群が舞い下りたように見えたので、あっと思って飛んで行って、ヒメイチゲの可憐な少女たちを踏んづけてしまった。

さかりのころのショウジョウバカマは、首をのっと伸ばしてから咲く。咲きながらも茎はどんどん伸びる。まるで長い竿の先へ、花飾りを一房くっつけたようだ。紫の萼がまっくろぐろとなり、花粉にまみれて白くなり、やがてしなびて乾く。花弁は時に牡丹色めいたり、えんじ色になったりしながら、そのままの形で青ざめて行き、しまいに緑になる。その間に、血廻しの曲芸をしている子房の三角坊主はどんどん太り、茎は一層伸びるばかりだ。そして古い袴の間から美しい新葉も開き出す。



戸隠村中社(上水内郡)のおばあさんは、ゴマをくっつけたような花だからゴマバナだ、というのが、ゴマとはあのまっすくについた大きな黒い萼のことである。そして、傘さしたように集まって咲きすど、といった。

中社の下の宝光社の主婦は、「五月初めせえば、蕨平の田のハバはゴマバナで一杯で、きれいなもんです」と話した。蕨平は楠川へ向いた、ゆるい南下りの水田地帯である。

五月末にその平の東端の男鹿沢ばたを歩いていたら、崖上の林からいく段も、開いた傘のようにさし出された青葉の枝の下で、花のすんだショウジョウバカマの茎が、いくつも高々と伸び出していた。指で計ったら三指しに余ったから、六十センチ以上あったわけだ。くると曲がった先で、菱形に固く実がいていた。

ゴマバナに似た感じの名に、コワメシバナ、キツネコワメシ(福井・秋田で。原色日本野外植物図譜)というのがある。ピンクの花のかたまりの上に黒い葯の散ったのを、赤飯に見立てたものと思うとほほえましい。この場合、葯はゴマよりも小豆かササゲ粒に見たのだろう。強飯や餅は、昔の農村の子供らにとってめったに会えぬ最上のご馳走だった。神棚や仏壇へ上げたあとは、待ちかねて蒸籠の傍を離れない子供たちにまず与えられる。ホカホカあったかく。一粒一粒がピンとして桃色にピカピカ光る。口へ入れる前に、ごくんと唾が吞めてしまう。小さな手のひらにのせてもらったその赤飯の一かたまりを、この花に見たのかもしれない、などと空想する。

ショウジョウバカマの出るような湿地にはノギランも多い。初めのころ、この軟らかい玉葉が広がった時は、私はすっかりショウジョウバカマだと思ってしまった。それがそのうち変な穂が出て来て、茶色めいた細かい花を開いたのでたまげた。ノギランの一名「狐の尾」というのを思い出しておかしかった。この葉は薄手で、夏前から縁が赤く丸まったり、白く晒れることが多いし、秋になってこれがみんな茶色に枯れてしまう

(次ページへ続く)

本号の内容

表紙の本	宇都宮貞子『草木おぼえ書』	2
活動報告	早春の筑波山ハイキング～筑波山神社、大御堂より花崗岩の山へ～	8
山行案内・1	鹿沼東大芦・長安寺より羽賀場山、お天気山	14
山行案内・2	東京、御岳山・日ノ出山ハイキング	15
読者からいただいたおたより		17
山口さんの自然講座・1	オオムラサキの生態と飼育について	17
山口さんの自然講座・2	紡錘虫チャートについて	18
お知らせ	自然観察クラブ2014年度会員名簿	19

と、間にあるショウジョウバカマが生き生きとあのすべらかな葉を広げ、まん中に蒼の玉をチョンと坐らせている姿が、とても頼もしく見える。

信濃町(同郡)霊仙寺のおばあさんの話に、「アメフリバナは桃色のきれいな花 いくつも寄ってまるまっちくなってる。田植えごろ、ワラビの時分だない(ね)。『アメフリバナ取んな。田植えに雨降ると』って子供にいうて(ことよ)」と。ショウジョウバカマのことで、田植えごろとはちょっと遅いが、ステッキのように伸びのをいうのかもしれない。

霊仙寺という部落は、飯綱火山の外輪山の中の北東の峰、霊仙寺山の中腹にある。戸隠一山の霊仙寺があった跡で、寺屋敷の礎石や、応永在銘の水鉢なども残っているが、にぎやかだった院坊や在家もどんどん退転して、今はたった三軒しか留まっていない。そのおばあさんの家も十年ほど前に、ニキロ下の高山へ引っ越してしまったのだ。アメフリバナの名はその高山や、そこから五キロ北の柏原でもいうが、じき東北の石橋ではキツネバナと呼ぶ。南隣の牟礼村(同郡)高岡では、きれいな花だからキツネノボタン、と聞いた。

野尻(信濃町)のHさんには、花が茶筌に似てるでチャセンバナという、と教えられた。新潟県妙高高原町の杉野沢では、チャセンバナともチョウセンバナともいう。古海(信濃町)でもチョウセンバナだが、チャセンの意味がわからなくなり、朝鮮花と解したのかもしれない。何にしても茶筌花とすれば、農民のつけた名でないことはたしかだ。



新潟県東頸城郡松代町の方言・民話の研究家、高橋八十八さんのお知らせによると、

——私たちの子供のころはチョーセンバナをアマ(女兒)どもが摘んで来て、もぎいで(ちぎって)皿に盛り、「ふかし(赤飯)だ」といってゴツツオゴト(ご馳走ごとで、ままごと)に遊んでいたようです。ちょうど赤飯にコマをまぶしたように感じられたのでしょう。花茎の伸びきったものは長くて中空なので、清水を飲むストローにしたものです。この花はいくつも名を持っており、カゴバナ、キツネバナ、カンタロッコなどとも人によって呼ばれます。カンタロッコは河童で、河太郎の変化ですが、イチリンソウやイワカガミをこう呼ぶ人もあります——

私の空想通り、子供たちは実際にこの花を赤飯にしていたのだ。松代の隣の松之山町で何人にも聞いたが、みなカゴバナといった。

山ノ内町(下高井郡)須賀川ではユキワリバナともウマバナともいう。この辺も庭にいくらも生えてみて、雪が消えると真っ先咲くという。その北隣の木島平村のおばあさんは、「この花はなでだか知らねどもヨメコロシてう。子供の時分、「その花とんな。ヨメコロシだから病人でできど」てったもんだに」と話した。

野沢温泉村(同郡)ではトチバナ、トチオバナ、トチヨバナなどという。「春早く土手に咲く。カタッコ(カタグリ)と同じ色だとも、それよかきれえだ。このコーカ(効果か。用途、効用の意)はネッカラ(まるで)知らんが、女子供(女の子)が積んで、かんざしだせて頭にさしたもんだ」と、K老人の話だった。

駒ヶ根市ではハヌケババアともジイバアともいう。シイバアはシュンランの名でもある。「川端の南向きのハバにいくらでもある。まだ何の花もないうち咲くで、子供が採りたがる。採り行っちゃ川へ落ちる。春先でつべーたい水だ。『ハヌケババア採り行って川へ落ちんな』と親たちが注意するに」と。この時は市立博物館で館長さんをはじめ、専門家、老人クラブの方々などに話していただいたのだった。

開田村(木曽郡)西野のおばあさんの話に、「ユキシタバナは雪消えるとすぐ咲くのう。低く咲いて伸びて行くで」と。

上松町(同郡)のKさんは、開田ではショウジョウバカマをアメフリバナという、と話したが、開田も広いから、べつの部落でいう名だろう。上松でユキシタバナといえどニリンソウで、ショウジョウバカマの名は聞けなかった。



著者についての人物情報が少ないため、本書初版に寄せられた序文を以て紹介に替えます。

草木覚書によせて・初版序文

串田孫一

著名の宇都宮貞子さんにお目にかかったことのある人は、私の周囲にはおりません。しかし、私の友人の多くは宇都宮さんのお名前はよく存じあげておりますし、その植物に関する全く独得の文章は、みんな好きで、愛読などという言葉は見当ちがい、ただ羨望するばかりです。真似ようにも真似られない文章です。

それは、宇都宮さんの書かれる内容、つまり、植物の姿や表情、それに対する土地の人たちの心、そういうものをすっきりと受けとめられた上で、静かに綴られていく文章です。

受けとめられた上で、と申しましたが、実はそれが簡単ではありません。植物が好きだというだけではこんなに綿密な見方はできません。

素朴で、歪みというものの全然見られない積極性、恐らく心を通わせながら、植物について土地の人たちと語り合う巧みさ。しかもそれが、また別の巧みさで文章の中に自然に織り込まれているのです。

宇都宮さんのなさっていらっしゃることはいかめしい学問などにはならず、学問を越え、私などは、もう何年も前に、はじめてその文章に接して以来、おそろしさを感じ続けています。お手紙によりますと、今度の御本になった原稿はほんの一部のようで、悠張りな私は、引き続いてそれらが立派な御本に造られ、読ませていただきたいものだ、と、せっかちに先のことを考えております。

昭和43年6月

宇都宮さんと私・初版序文

東京大学教授 倉田 悟

宇都宮貞子さんのお名前を知ったのは、たしか昭和三十八年の初夏の頃だった。大学院の緒方君が「先生、これをご覧になったことがありますか」と、アルバのバック・ナンバーを数冊持って来てくれた。当時「日本主要樹木名方言集」の原稿とりまとめをしていた私は、彼が地方へ植物調査に行くとき、里人たちから植物方言を聞いてくれるよう頼んでおいたのだが、気に留めて、「草木ノート」など、宇都宮さんの文章が載っている号だけを古本屋から求めて来てくれたのだった。そこには私にとって未知の北信地方の植物民俗が次々に書かれ、思わず一気に読み通してしまった。始めは知らない植物方言などがあまりに多く出て来るので半信半疑であった私だが、読み進むにつれ、植物学的にも極めて正確であることがその詳細な植物観察記録から了解できた。早速、クマノミズキの方言名、カタショ・ナキビショ・ハナツタラシなどをはじめ、納得のできるものを沢山、拙著に載録させていただいた。

爾来私の恋人のように想いつづけていた宇都宮さんを、昨夏戸隠の帰りに訪ね、はじめてお会いすることができた。鬼無里のオハグロシダのことなどをお話し下さる下地には、豊富な植物民俗採訪記録をお持ちのことが察せられ、その発表される日を期待していた所、今やその第一巻ともいべき本書が出版される運びとなり、たいへん嬉しいことである。宇都宮さんの麗筆によって広く紹介される信州の植物たちも大喜びに違いない。

植物民俗学ノートとして価値の高い本書が広い読者層の支持を得て、ひきつづき、続巻の計画刊行に到ることを願ってやまない。

昭和43年6月

宇都宮貞子・人物紹介と主要著書目録

うつのみや さだこ、1908(明治 41).12.3－1992(平成 4).2.12。長野市生まれ。旧制県立長野高女卒、東京女子大学中退。植物学者ではないが、観察・聞き取りを元に書き留めた植物の民俗学的な一編を雑誌「アルプ」15 号(1959.5)～300 号(1983.2)に「草木ノート」という題で連載。1984(昭和 59)年、エイボン教育賞受賞。

草木覚書（草木と民俗の会 1968）

草木ノート（読売新聞社 1970）

山村の四季（創文社 1971）

草木おぼえ書（読売新聞社 1972）

八重葎帖（創文社 1973）

奥信濃野沢のはなし その3（銀河書房編・住吉屋 1974）

螢草抄（創文社 1975）

草木の四季（木村 茂／銅版画・書肆科野 1977）

草木の話―秋・冬―、―春・夏―（読売新聞社 1977）

たんたん滝水一村の自然と生活―（創文社 1978）

古京暮春（歌集）（桜華書林 1980）

雪の夜咄（東京新聞出版局 1980）

植物と民俗（岩崎美術社 1980(民俗民芸双書 8 7)）

山にあそび野にあそぶ（東京新聞出版局 1980）

野山の十二カ月（評論社 1981(野外への扉 2)）

草木抄―四季―（熊田達夫／写真・山と溪谷社 1981）

秋の草木、冬の草木、夏の草木（新潮社 1984(新潮文庫)）

春の草木（新潮社 1985(新潮文庫)）

四季の花（宮沢千賀／絵 桜華書林 1986）

科の木帖（文京書房 1990）

私の草木誌（筑摩書房 1991）



※ 版を重ねているものは初版のみ挙げました。

早春の筑波山ハイキング ～筑波山神社、大御堂より花崗岩の山へ～ 3月9日（日） 天気・はれ

案 内

山麓より中腹以上に到るまでは悉く花崗岩より構造せられ、（中略）町より西峰即ち男体山の絶頂まで五十町、頂は閃緑岩より成る。伊弉諾尊を祀り、神社数座あり、頂よりは関東平原の全体、富士、浅間、日光、日光の連山を望み、（中略）女体山頂も亦た閃緑岩より構造せられ、伊弉冊尊を祀り、眺望の壮宏なる男体山に譲らず、（後略）

志賀重昂著『日本風景論』

（明治27年10月27日・政教社発行）より「筑波山」

（書影は昭和12年1月15日・岩波文庫版）



関東から見える独立した山といえば西の富士山、東の筑波山が代表的である。深田久弥によって選ばれた日本百名山において、この二つの山は最も標高の高い山と最も標高の低い山に位置する。しかし常陸の平野の真ん中に立つ筑波は意想外に高く、その姿、歴史共に、西の富士山と並べてもひけを取らぬ名山である。

今回は筑波山神社および大御堂に参詣し、御幸ヶ原に登って男体山を往復、女体山を越えて奇岩怪石を見学しながらつつじヶ丘コースを下り、弁慶茶屋跡から筑波山神社に戻りましょう。時間があればケーブルカーに乗ってもう一度御幸ヶ原（山頂駅）を往復してみるの一興ですね。標高は877m、山頂に一等三角点があります。

また、この標高では珍しくブナの巨木が見られます。

行 程：鹿沼(6:15)―西川田―上三川―二宮―筑西―(8:15)筑波山神社…(45分)
…中の茶屋跡…(40分)…御幸ヶ原…(15分)…男体山…(10分)…
御幸ヶ原…(15分)…女体山…(30分)…弁慶茶屋跡…(40分)…
つつじヶ丘分岐…(30分)…筑波山神社―鹿沼

報 告 昨年9月の那須岳ハイキングは駐車場が満車で断念したので、自然観察クラブとしては今回が初めての日本百名山登山となりました。我々よりひと足早く日光を出

発してきた佐々木一家と合流して出発。壬生、二宮と進んで行くうちに、筑波山は次第に大きく、しかも急峻に見えてきます。



山麓の緩斜面を車で登りつめ、結構な高台の上に建つ筑波山神社から、ほぼケーブルカーに沿った道を登ります。

所々に石碑を見つけて解説してくれる佐々木氏には、山登りのもう一つの醍醐味を教えてもらったように思います。

筑波山は9合目くらいまでスダジイやアカガシ、モミ、スギなどの常緑樹の森、しかも巨樹が多い点で太古の森の趣のある山です。また九合目以上は落葉樹の明るい森で、ブナの、やはり巨樹が多い点で貴重です。国定公園に指定されるのも首肯されます。薄暗い常緑樹の森が終わって落葉樹の明るい森に飛び出すと、間もなく御幸ヶ原です。

ケーブルカーの山頂駅、御幸ヶ原は西の男体山と東の女体山との鞍部。まずは男体山を往復。予想通りの混雑で、山頂では写真を撮ってすぐに退散。最高点のある女体山もケーブルテレビが撮影中で渋滞。山頂は斑れい岩の巨岩が露出する険しい岩場で、鹿沼の岩山を思わせ、周りはまるで絶壁。霞ヶ浦がとんでもなく大きく広がっています。

ケーブルカーで下山したい、という声が大勢であったものの、奇岩怪石を見たいという賢い少数意見を尊重し、ツツジヶ丘コースを下ることにしました。北斗岩、裏面大黒、国割石、出船入船、紫雲石、母の胎内くぐりなどの奇岩怪石は、鹿沼の三枚石や象ノ鼻などを思わせるもので花崗岩かと思いきや、これらは斑れい岩で、いずれも地下深部でマグマが冷え固まってできた深成岩であるとのこと。のちに地盤の隆起とともに地表付近に現れ、やがて周囲の柔らかい岩石が浸食されて、硬い深成岩の部分だけがとり残されてきた残丘です。斑れい岩は筑波山の中腹から山頂にかけて分布しています。約7500万年前に地下でマグマが固まってできたもので、その後に地下でさまざまな力を受け、やがて隆起して地表に現れました。この長い時間の中で受けた力の大きさや向きが変化することによって、斑れい岩にたくさんの割れ目（節理）が出来ました。現在見られる巨岩・奇岩は、この割れ目に沿って崩れたときに取り残された岩や、崩れ落ちてきた



筑波山(女体山)山頂にて



眼下に広がる絶景
彼方に霞ヶ浦が見えるはず…
(男体山頂)

岩が山の中腹に取り残されたり他の岩に引っかかったりしてできたものです。黒～濃緑灰白を呈し、輝石や角閃石を多く含み、風化に強く、硬い岩石です。

一方、花崗岩は、中腹から麓にかけて斑れい岩を取り巻くように分布しています。約 6000 万年前に地下でできた深成岩で、白～薄灰色を呈し、石英と長石を多く含み、風化するとボロボロになります。

さて、奇岩怪石の下降に思いのほか時間がかかりました。ブナの大木の立つ林を通り、さらに奇岩怪石をいくつも越えてやっと弁慶茶屋跡に到着。ここから尾根をはずれて、南側斜面を筑波山神社めざして下ります。常緑樹の森に戻ると薄暗くなってカメラの出番もなくなり、ひたすら歩く。やっと人家が出てきて、古い道しるべを発見。さらに筑波山神社に入ると、珍しい形の五輪塔が見られました。

伸二君が駆けてきて、「阿部さん、まだ間に合いますよ」との声。全員意見が一致し、ケーブルカーに乗って「もう一度」山頂駅まで往復することになりました。山頂駅にはすでに、冬の寒さが戻っていました。でも「ソフトクリームがおいしかった」。

参考資料：「筑波山自然観察ハンドブック」（NPO法人つくば環境フォーラム発行）

※ 参加者

小川知峻・裕月・真司、佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、平井亜湖・祐子、小島美穂、石崎隆史・裕子、阿部良司（計 14 名）

※ 見た樹木(50音順)

（咲いていた木の花）ウメ、ヤブツバキ、
（常緑樹）アオキ、アカマツ、アカガシ、アセビ、
イヌガヤ、ウラジロガシ、クスノキ、シキミ、シロダモ、
スギ、スダジイ、チャノキ、ヒサカキ、ヒノキ、
モミ、ミヤマシキミ、ヤツデ、ヤブコウジ、ヤマツツジ、ユズリハ、

（葉の落ちていた木）ウツギ、オオモミジ、カジカエデ、コナラ、チドリノキ、
ブナ、ホオノキ、ヤマモミジ、



鬱蒼たるスギの森

(常緑のつる植物) イタビカズラ、キツタ、
ツルマサキ、テイカカズラ

マメツタ→
(シダの仲間)



✽ 聞こえた鳥

ウソ、エナガ、コゲラ、ハシブトガラス、ヒガラ、
メジロ、ヤマガラ

✽ 筑波ワンダーランド写真館



ケーブルカー沿いに
登って行く



↑山頂めざして↑



↑雪が残っていたり
←凍っていたり



男体山頂の祠

奇岩怪石の間を
攀じ下りる



日本百名山・筑波山に登頂！



一等三角点にタッチ！



登ってきた山を振り返る→



ロープウェイもありました



←最後にケーブルカーで一往復↑

✿ 筑波の石碑いろいろ



登山道途中の石碑



役行者の足跡が…
山中にて



明和年間のものらしい
供養塔



「巳待ち供養塔」と…
近くに「白蛇弁天」↓



「右加しまかい道
左御やまミち」と



「女体山」の碑



変わった形の
五輪塔
筑波山神社境内にて



✿ 筑波・木の幹いろいろ

アカガシ



ブナ



これもブナ？



ヤマウルシ



✿ 筑波の奇岩怪石いろいろ



ガマ石



北斗岩



裏面大黒



出船入船



高天原にて



母の胎内くぐり



弁慶七戻り

クマシデ



ミヤマシキミ（蕾）



花盛りの
オオイヌノフグリ



北光チャレンジスクール 鹿沼東大芦・長安寺より羽賀場山、お天気山



だが春の山と言えは、私はこの五六千尺代の山がいいように考える。七千尺、八千尺の山となると、平地の新緑の頃は未だ冬である。春の山と言えは、私は、矢張、春らしいものが山に出ているものを好む。夏には八千尺以下の山を狙ったことは、嘗ての夏に苗場山に登った以外には殆んどないが、四五月の頃には金峰山、国師岳、甲武信岳、木賊山等の八千尺代の山に登ったのを除いては、五六千尺以上の山に登ったことは余りない。私のように登るという運動以外に新緑や

花の彩どりにうっとりとなり、それに多大の関心をもつものに取っては、春の山の高さの問題は第二位に落ちて仕舞う。

田部重治著『青葉の旅・落葉の旅』(昭和19年5月28日・六合書院発行)

昨年度は栃木県内に12か所(八溝山は茨城県)置かれている一等三角点のある山のうち、大鳥屋山と松倉山、晃石山に登りました。今年度最初の山は、鹿沼で唯一、一等三角点のある羽賀場山です。大芦川沿いの他の山と同様、この山もほとんどがスギ、ヒノキの植林ですが、稜線上には落葉樹が残されていることが多く、珍しい植物なども見つかるものです。この冬の大雪のため、倒木や落ちた枝などで道は荒れているかもしれませんが、登れるところまで登ってみましょう。順調に進めばさらに西進し、お天気山への道を探検してみたいと思います。

日 時：4月20日(日) AM7:00北小西門集合(解散はPM4:00頃)

行 程：北小——瑞光寺——引田橋——古関——長安寺(30分)……送電線鉄塔下
(20分)……伐採地(25分)……主稜線(20分)……羽賀場山
……お天気山……羽賀場山(70分)……長安寺——北小

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒(ポット)、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、

筆記用具、レジ袋、レジャーシート、おやつ、お弁当

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ステッキ、ヘッドランプ、

参考書（栃木の山150）、1/25,000 地形図は「文挾」

会 費：おとな 200 円、子ども 100 円、

他に保険料（1 年間）おとな 1,300 円、子ども 800 円

∞ 山行案内・2 ∞

東京、御岳山・日ノ出山ハイキング

…又、御嶽駅から御岳に至り、七代の滝を見てから五日市まで溪流に沿って下るのも面白い。更に少しく足が慣れたら、御岳から大岳山へ往復するのもよい。御岳から大岳までの道は2つあって、1つは御岳の奥ノ院を通って行くもの、も1つは七代の滝を見て行くもので、いずれか1つを行って別の道をかえる方が面白い。途中には滝が多く、山容には変化があり、眺望は面白く、春には新緑は洗ったようにあざやかにつつじや藤が多い。これほどのよいところが東京から往復出来るとは有難いことである。健脚の人ならば、青梅線を早く行って、御嶽駅から出来るかぎり乗物を利用して御岳に登り大岳に至り、大岳から直接に秋川の谷に降ることも出来、更に御岳に引返して、それから五日市に行くことも出来る。御岳から五日市へと溪流に沿って行けば、自然と山里とが最も調和せる最も山村らしいところを通ることが出来る。斯ういふところを通ると、信州や飛騨あたりの山里をあるくような気がする。



田部重治著『峠と高原』（昭和13年8月1日・新潮社発行）

日 時：5月3日（土） AM6：00 JR鹿沼駅集合

行 程：日光(6:00)——鹿沼(6:28)——(6:41)宇都宮(6:53 湘南新宿ライン逗子行)
——(8:43)新宿(8:47 ホリデー快速おくたま5号)——(10:09)御嶽
(10:14 西東京バス)——ケーブル下・滝本(10:45 御岳山ケーブルカー)
——御岳山…(25分)…御岳神社…(5分)…日ノ出分岐…(55分)…日ノ出山
…(15分)…養沢鍾乳洞分岐…(20分)…養沢鍾乳洞…(25分)…上養沢——

(西東京バス 35 分)——武蔵五日市——新宿または上野——宇都宮——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、

筆記用具、レジ袋、レジャーシート、おやつ、お弁当

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ステッキ、ヘッドランプ、

1/25,000 地形図は「武蔵御岳」

費 用：参加費おとな 200 円、子ども 100 円、他に交通費として、

休日おでかけパス 2,670 円（子ども 1,330 円）、

自治医大までの往復 1,160 円（子ども半額）、

（往路）西東京バス 280 円（子ども半額）、

御岳登山鉄道ケーブルカー 590 円（子ども 300 円）、

（復路）西東京バス 480 円（子ども半額）、食事代他、

保険料は北光チャレンジスクールと共通

※ 4月30日（水）までにお申し込みください。

問合せ&申込みは 090-1884-3774 自然観察クラブ 阿部まで

北光チャレンジスクール・山行案内について

昨年発行の月報第13号で田部重治を取り上げたことから、白坂正治氏より連絡をいただき、田部重治研究会の存在を知りました。私たちは田部重治の作品を紹介するくらいが関の山で、「研究」とまでは及びもつかぬものですが、田部重治の本を一つ一つ手に取ってめくって見るだけでも、いつか心にとまった内容が積み重なり、新たな事実にめぐり会い、また新たな感動を生むかもしれません。そこで今年度は毎月田部先生にご登場いただき、「山へのいざない」をお願いすることにしました。小さいながら、少しでも多くの方が田部作品にふれる機会を提供し、田舎の低山愛好家（本当は高い山にも登りたいのだが）の立場から田部重治研究会を応援していきたいと思えます。



まだ気温の上下はありますが、ぽかぽか陽気となって参りました。『月報第 22 号』拝受いたしました。『鶴のやうに』の表紙入りの御掲載、“えにし”の有難さをしみじみと感じております。まさに元々の語意そのものの、めったにない奇跡でしょう。今号はまたまた田部先生ゆかりの人物の一人、深田久弥さんですね。紹介文の中にございます『日本アルプスと秩父巡禮』は深田さんが確か北星堂まで行き残っていた最後の一冊を購入されたのでしたね。ほのぼのとしたエピソードだと思います。ところで 6 日は高尾山に行かれたのですか。行きやすいので三歳から、かなり様々、コースを変え楽しみ、奥高尾縦走もしましたが、ミシュランになってからは遠慮(?)してまゐります。乱筆乱文にて。

(白坂正治)

※ 白坂氏には会報をお送りするたびお礼状をいただいています。

編集者には大いなる励みです。皆様の投稿をお待ちしています

山口さんの自然講座・1

オオムラサキの生態と飼育について

初めてオオムラサキの飼育をしたのは、中学3年生の夏でした。

オスとメスを採集し、未交尾であれば交尾させます。交尾を終えたメスは、お尻に白い毛がついているので見分けがつきます。オスとメスを両手で持ち、お尻をつけて交尾させます。これはハンドペアリングという方法で、大型のチョウに有効です。オオムラサキは、あせらずにお見合いをさせたりします。自然界では7月下旬から8月上旬のことです。

交尾後早くて2日ぐらいで産卵します。卵が孵化するのは1週間前後です。取ってきたエサを長持ちさせるために、枝の根元を水中でハサミで切ります。水切りした枝をペットボトルなどに入れて、すき間をなくし、ビニール袋をかぶせて飼育します。新鮮なエサを求めて移動できなくするためです。観察するのに一部を残して生えているエノキに移すのもよいでしょう。このときも袋掛けします。直射日光が

当たって温度が上がり過ぎない枝を選びます。

エノキの葉が落ちる頃になると、幼虫は木を下りエノキ



の落葉の裏で越冬します。これまで緑色だった体色が落葉と同じ色に変わります。保護色の妙です。卵からかえったものが1齢幼虫で脱皮するごとに齢数が増え、4齢で越冬します。孵化が遅いものは3齢で越冬し、4齢は6齢、3齢のものは5齢で蛹になります。私は冬越しのときに全滅してしまいました。

次の年も結果は同じです。環境が合わないのではと思い、自然の中の幼虫はどうなのか気になりました。幼虫がいたのは、谷川沿いの落葉が常に湿っている所であり、堆積した落葉の上から2枚目から4枚目のところだったのです。立派なエノキがあっても落葉が乾燥するところでは見出せませんでした。失敗の原因はこれだったのです。冬越しさせるときは、エノキの葉を6層以上は敷き、いつも湿った状態に保つことです。

エノキの葉が芽吹く頃に木に登り、エサを食べる頃は再び緑色になります。そして、無事に蛹化した幼虫は、南の暖かい所では6月中～下旬に、北では8月上旬に羽化します。茂呂山は7月10日前後に姿を現します。

成虫はコナラなどの甘い樹液に集まりますが、動物の死体や牛などの糞尿にも集まるのは、飛ぶ宝石と呼ばれる南米のアグリアスタテハの一面も持っています。夕方近くになると、オスは雑木林の樹上にテリトリーを張り、侵入する者を追い払います。自分より大きい野鳥にも挑む姿は、国蝶として世界に誇れる名蝶なのです。

※ 細かいことまでは書き尽くせませんが、常に新鮮なエサを与えることと、冬の管理に注意すれば、美しい成虫の姿が見られることでしょう。

山口さんの自然講座・2

紡錘虫チャートについて

春の到来で、何か関西の自然情報をお伝えしたいところですが、こちらでは活動の場がなく、ツクシ取りに出かけたただけなので、これといったものではありません。ただ1つ気づいたことは、在来種のカンサイタンポポが少なくなっていて、セイヨウタンポポがやたら増えていたことで

す。そんなことなので、鹿沼にいたときのことで、どうしても書いておきたいのが、葛生産のチャートです。



チャートは、火打ち石と呼ばれ、鉄塊と打ち合わせて油に火をつけるのに使われた岩石です。原始時代は黒曜石やサヌカイトと共に重要な石器の材料でした。チャートは珪酸を9割以上含んだ微晶質の石英からできています。石灰岩と同じく無機質起源のものと有機質起源のものがあります。有機質のものは、古生代の海に生息していた放散虫から出た珪酸によってできた放散虫チャートです。ところが、葛生では石灰岩と苦灰岩（ドロマイト）の間に塊状となっています。おそらく、紡錘虫の化石を含んだ石灰岩が更に珪酸によってチャートにおきかえられたと考えられます。放散虫チャートは多く、時代によって放散虫の種類が違うので、できた時代が分かるのが特徴ですが、紡錘虫チャートは極めて珍しいもので、黄色味を帯びたチャートに黒い紡錘虫の化石が印象的です。チャートの色は、石灰岩に似たものから、白、赤、青、黒、緑などさまざまです。私がまだ鹿沼にいる頃、阿部先生と行った石裂山の上の方も、白色系のチャートがみられます。放散虫は小さく、肉眼では見られませんから、どのタイプのチャートかは、私には分かりませんが、石裂山へ登ったときは、チャートを観察してください。

(山口龍治)

お知らせ

自然観察クラブ 2014年度 会員名簿

(ほぼ50音順・敬称略)

お子さまの名は省略させていただいております。

石崎 隆史・裕子

祝 純子

大貫 とし子

小川 真司・恵美

小島 美穂

櫻井 節子

佐々木 茂・理恵

塩入 宏行・佳子

新川 キミ子

鈴木 康之・友紀

高山 公男・良恵

豊田 敏盟

西山 義信・弓子

山口 龍治

若林 滋子

渡辺 真知子

阿部 良司・みゆき

自然観察クラブ 会費納入のお願い

- ☆ 年会費（個人または家族） 1,800 円
 - 〃 （会報不要または直接取りに来られる方） 600 円
 - ※ 会報はインターネットでご覧になれます。
- ☆ 会費の主な用途
会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等）、
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第23号

2014年4月発行
北光・自然観察クラブ 鹿沼
鹿沼市戸張町1818
(クリーニングハウスあべ内)
発行人 阿部 良司

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

